

週報

こひつじ

第39巻 48号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

ピラトの決断

ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません」(ヨハネ一八の三八)

その一 歴史的舞台に立っていたピラト

ピラトとはだれか。

イエスを最終的に死に渡した政 見たのは、それが最初だった。が、治家である。そのとき彼は大きな歴史的舞台に

ローマ国内には、彼ほどの政 立たされていたのだ。

治家なら何人もいただろう。しか 天と地、そしてその後の長い人し、その多くが忘れ去られたにも 類の歴史が、強い関心をもってピ

かかわらず、ピラトだけが、その ラトの言動に目を留めた。名を、良くも悪くも歴史に残すこ いったい彼はイエスをどう扱う

とになった。

それはなぜか。しかし、ピラトは、自分よりも、

イエスがユダヤの指導者たちに あるいはカイザルよりもはるかによって訴えられたとき、たまたま 偉大で、人類に大きな影響を与え

彼がユダヤの総督であったからだ。る方の前に自分がいることに気が

彼は、そんな方に向かつて傲慢 ず・・・病気のときや牢にいたとにも言った。きにもたずねてくれなかった」(マ

「あなたは私に話さないのですか。タイ二五の四二、四三)」

私にはあなたを釈放する権威があ その言葉に、彼らはみな一様に驚いてこう答えたのである。

「主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、・・・病気をし、

イエスを自由にするのも拘束す 牢におられるのを見て、お世話を

にも、自分次第だと彼はイエス しなかったのでしょうか」

に言ったのだ。 われわれはみな、いつそういう

ピラトだけではない。私たちも 舞台に立っているのか、わからない

最初イエスについて聞いたとき、 なのだ。

こう思ったのではないか。 そういう歴史的瞬間は、身近に

「イエスを信じるか、信じないか。 ある。

それは私次第だ」と。 かつて大分県の教育委員会の汚

しかしもし、その方がほんとう 職が新聞を騒がせたことがある。

はだれであるかがわかっていたら、 そんな中に、こんな記事があつ

私たちはひざまずいて、ただちに た。

その方を礼拝したことだろう。 ひとりの女性が採用試験に何度

ピラトは自分の前にいる人がだ か失敗していた。すると、一定の

れかを知らなかったために、あん お金をもって県会議員に頼めば採

な傲慢な態度に出たのだが、ピラ 用されると、ある知人から持ちか

トだけではない、私たちも知らな けられた。

いで大切な機会を失うことがある 母親は言った。

のではないか。 「おまえの一生を左右することだ

イエスは言われなかったか。 から、頼んでみるのはどうだろう」

「おまえたちは、わたしが空腹 しかしその女性は、

であったとき、食べる物をくれ 「そうやって先生になって、子ども

もたちに何を教えるの」

と言つて、きつぱりと断つた。

彼女は、そのとき歴史的舞台に立っていた。そして永遠に価値ある決断をしたのである。

そんな場面に遭遇することが、だれにも一生に一度や二度はあるだろう。

そのとき私たちもまた天上から、ル記一章からハンナの祈りについて時間がたち、自分が下した決断の結果を知ることになる。

歴史はそういう意味では神の審判だ。

そして歴史では、しばしば大きな事件とそれは思われたものが、やがてのちに小さな事件であったり、小さな事件と思つて見逃したものが、のちに大きな事件であつたりする。

だから正しい判断をするには、物事を遠近法によつて見る力が求められるのだろう。(続)

今日の礼拝

第一礼拝は午前10時から、第二礼拝は午前11時から。

○教会学校は午前10時から。○説教は西岡潤也さん。

先週の礼拝

○司会は岩崎宏志さん、奏楽は吉岡隆夫さん。○説教は米村牧師。第一サムエ

ンナは子がない悩みを神に訴えましたが、その祈りはやがて、イスラエルの指導者の到来を求め祈りに変わりました。彼女によつて生まれたのはイスラエル中興の祖である預言者サムエルだったのです。

○大牟田で育つた後藤加奈さん

んは、子どもの頃、ある宣教師の子どもに導かれて教会へ行つたと前に語つてくださいました。その子どもさんは、ケーラー宣教師の次女メロデーちゃんとかわり、今はアメリカに住んでおられます

が、先日、来日されたおり、後藤さんは、数十年ぶりに大牟田で再

会できたとのことです。その喜びの証を第二礼拝でしてくださいました。

先週の出席

第一礼拝が四二名、第二が四一名、合計八三名(男二七、女五六)子ども九名。合わせて九二名。

洗礼を授かるにあたって、自分

キリスト教との出会い④

三浦 桂

が初めてイエス様という存在を知つた日から今日までの間のことを思い起こしました。すると神様はこれまで私の気づかないところで、たくさんの恵みを与えてくださり、常に守つてくださっていたのだということが分かり、涙が溢れました。

アメリカで過ごした幼少期は、カルチャーショックや言語の壁にぶつかつたり、度々差別を受けたりなど、自分ではどうすることもできなくて無力感に押しつぶされそうになることがありました。しかし、そんな中でも私は登下校中の通学路で触れる自然に励まされていきました。小川を渡つたり、ビバーの巣を見つけて観察したり、季節によつて表情を変える林の中を歩きながらスクールバスのバス停まで行く通学路が私の毎日の楽しみでした。林も小川も動物たちも全て神様が創造されたものです。私たち人間には決して真似できない神様の御業に触れ、当時の私は癒しと励ましを受け取っていたのだと思います。(続)